Tokyo Gakugei University Repository
東京学芸大学リポジトリ
http://ir.u-gakugei.ac.jp/

Title	「生活時間調査記録」を扱った小学校家庭科での児童の気づき(個人研究・共同研究)
Author(s)	小野, 恭子
Citation	東京学芸大学附属学校研究紀要, 36: 65-73
Issue Date	2009-06-00
URL	http://hdl.handle.net/2309/105231
Publisher	東京学芸大学附属学校研究会
Rights	

「生活時間調査記録」を扱った小学校家庭科での児童の気づき

東京学芸大学附属大泉小学校　　小　野　恭　子

目　　次

1．はじめに …… 66

2．分析方法と授業の流れ …… 66

3．結果 …… 67
(1) 自分の生活に対する気づき …… 67
(2) 家族に対する児童の気づき …… 69

4．成果と課題 …… 73
(1) 成果 …… 73
(2) 課題 …… 73

「生活時間調査記録」を扱った小学校家庭科での児童の気づき

東京学芸大学附属大泉小学校　　小　野　恭　子

1．はじめに

小学校家庭科の指導要領では、家族の生活や自分自身の生活を見つめなおし、よりよい生活を送るための授業が組まれている。この学習単元では自分自身の生活を見つめなおし、どのような時間をすごしているのか考え、家族との生活を一緒に見直したときに自分が家族のためにどのようなことができるのかを考えることが学習課題となる。

平成22年度、指導要領の改訂の、（ｉ）改善の基本方針において「自己と家庭、家庭と社会とのつながりを重視し」、「家族の一員としての……自分を自覚し」と述べられ家庭と社会や、家族とのかかわりをいっそう重要視する方向が示されている。生活時間は、家庭と社会とのかかわりを見とれ、家族とのかかわりに気づく題材として重要だと考えた。

こうした視点に基づき、小学校における生活時間を題材にした授業展開を考えその授業の中で児童の学びを確認することにした。

中山ら[1)]によると、生活時間を使った授業の学習では、教師主導の場合には、児童がジェンダーについて気づくことが多く、母親と父親の家事分担について多くのことを学び、教師主導でない場合には、ジェンダーのことだけでなく、ペイドワークアンペイドワークにまで気づき学習が深まったとある。

また小野[2)]によると、子どもの生活は母親が仕事を持っているかどうかによって、変化が見られるとあり、子どもの生活時間は親の生活時間と深くかかわっていることが明らかになっている。したがって、親の生活時間を通して、家庭と社会とのかかわりに気づく授業が可能と考えた。そこで、自分と親の生活時間調査を記録し、その記録から、児童がどのようなことに気づくか分析し、教材の意味を検討することにした。

2．分析方法と授業の流れ

児童が何を考え、何について学んだのかを分析するために、授業全体と班ごとにビデオカメラで記録した。その記録を書き起こし、どのような発言しているのか、何に気が付いているのか分析を行った。また授業で使ったワークシートに記述されている事柄から、児童が授業で気づいたことと学んだことについても分析を行った。

この授業の対象者は、東京都内にある国立大学附属小学校の 5 年生40名（男子21名女子19名）である。また授業の実施時期は、2007年 2 月であり、対象者が 5 年生の 3 学期に行った。

授業計画は表 1 のとおりである。

表1　授業計画

授業時間	児童の活動
第 1 次 1 時間	・自分の生活に対しての記録がない状態で、普段の生活では何の行動をどのくらい時間をかけているのか思い出す。 ・自分と家族の生活を、日記形式の生活時間調査で記録することで、一日の生活の行動や家族との関わりなどが、確認できることを知る。

宿題	・自分と家族（父親と母親）の生活時間調査の記録を、平日・休日の二日分を行う。
第 2 次 2 時間	・生活時間の記録から、様々な行動を行っていることを知り、その行動ごとに使っている時間を求める。 ・まず行動の種類を、人にしてもらえる行動と人にしてもらうと意味のない行動に分ける。 ・人にしてもらうと意味のない行動を、各班で自由に 4 つに分類する。 ・分類を行った行動の合計時間を求め、平日と休日の活動の種類とその時間量を比べる。 ・このデータから、気がついたことをまとめる。 ・気がついたことを学級で話し合い、その理由についても考える。 ・授業で、わかったことや考えたことをワークシートにまとめる。
第 3 次 2 時間	・家族の生活時間調査記録を、自分たちの行動分類と同じようにまとめ、平日と休日を比較する。 ・行動分類した活動の時間量の合計から、親の特徴をつかむ。 ・親の行動の特徴とその理由について、学級全体で話し合う。 ・自分と家族の行動の種類と、その時間量の合計を比べ、気がついたことをワークシートにまとめる。 ・自分がこれからどのような生活をしていきたいと思うのか考え、ワークシートにまとめる。

3．結　果

(1) 自分の生活に対する児童の気づき

第 1 次では、はじめに一日に行っている行動を児童に挙げてもらった。児童が挙げた行動は睡眠・食事・学校・勉強・風呂の 5 項目であった。次に、その行動に使った時間量を聞いたところ、明確には答えられなかった。5 項目以外の行動をあげる児童はいなかった。

そこ宿題として、1 日24時間を10分ごとに区切った日記形式の生活時間記録票に、平日と休日の 2 日間の生活を記録させることにした。また、自分の生活だけでなく家族の生活も知るために、両親の平日と休日の二日間の行動も記録してもらうこととした。

第 2 次ではまず自分の生活について振り返ることにした。授業の流れは表 2 のとおりである。

表2　授業のながれ（第2次　2時間）

教師の働きかけ	児童の反応
・自分の生活を平日と休日に分けて記録してきてもらいましたが、まず平日の行動をあげて見ましょう。	・①睡眠・食事・登校・洗面・着替え・勉強・給食・掃除・習い事・読書・テレビ・お手伝い・ゲーム・パソコン・新聞・家族としゃべる・・・。
・では、その行動を「人にしてもらえる行動」、「人にしてもらえない行動」に分けてもらいたいと思います。どの行動が、人にしてもらえる行動だと思いますか？	・②人にしてもらえる行動には、勉強やお手伝いが入るのではないかな。 ・勉強は自分のためにやっているから、勉強は「人にしてもらえない行動」になる。でもテレビを見るのも自分が楽しむために見るのだから、「人にしてもらえない行動」になる。

・人にしてもらえない行動の合計時間を求めてみよう	・③お手伝いをしていないから、0 分。学校の掃除も入れていいなら20分になる。人のためにしている行動はない。
・班毎に人にしてもらえる行動を 4 つに分類してみよう。またその分類にあわせて自分の生活時間の合計を出してみよう。	・④睡眠と食事と洗面は生活、テレビや読書・習い事などは娯楽、学校の時間と勉強は勉強、通学や習い事に行くための時間は、外出としてみよう。
・自分の生活の特徴は、どんな所にあるのか、その理由も考えてみよう。	・自分の生活はストレス解消のための時間が多かった。食事の時間が90分とは少ないので、その分ストレス解消のために時間を使ってしまったのではないか。
・自分たちの生活を見て気づいたことを発表しましょう。	・自分では、平日と休日の差がこんなにあるとは思っていなかったけれど、実際に数字で見てみると大きな差があった。
	・⑤平日は役に立つための行動と生きて行くために必要な行動を行っている。だから、自分に必要な行動がほとんどだけれども、休日になると楽しむための行動が入ってくる。

まず児童の生活でどのような行動を行っているか挙げさせた。すると、一日にはたくさんの行動を行っていることに気づいた。（下線①）次にこれらの行動を、人にしてもらえる行動と人にしてもらえない行動に分けさせた。すると、人にしてもらえる行動にお手伝いなどの家事が入ることに気づいた。（下線②）次に人にしてもらえる行動の合計時間を求めさせた。児童は、人にしてもらえる行動は、児童が人のためにしている行動であることに気づき、時間を費やしていないことに気づいた。（下線③）

さらに各班で、人にしてもらえない行動を4つに分類させた。児童は行動の内容を比べ、下線④のように、「娯楽」「外出」など、似たような行動をグループにしながら最終的に4つに分けていった。こうした分類を行っていくことを通して、自分のために行っている生活がほとんどであることに気づいていた。また、下線⑤のように、休日になると「娯楽」の時間が増えてくるなど、平日と休日の違いなどの特徴をつかんでいた。

最後に、自分の生活時間の記録から、気づいたことをワークシートにまとめさせた。

表３　自分の生活についての児童の気づき

観点	記述数	記述例
学校の有無について	9	・⑥平日は学校があるから、休日より教育が長い。休日は学校に行かないから娯楽の時間が長い。 ・休日は学校に行っていないから、勉強時間が少ない。 ・平日の遊び時間が少なく、休日は逆に多かった。読書の時間が平日も休日もなかったことに驚いた。

人にしてもらえる行動と人にしてもらえない行動について	4	・人にしてもらえる行動が休日は何もない。 ・人にしてもらえる行動はたくさんあると思ったけど、平日はなかった。 ・⑦人にしてもらえる行動は休日と平日で 2 時間ぐらい差がある。休日のほうが、人にしてもらえる行動が多い。 ・人にしてもらえる行動を平日していないということは、全部人任せにしているということなので、負担をかけているとわかった。その分、休日は410分買い物を手伝っている。休日だけ平日だけだとバランスが悪い。
行動の種類や量の違いについて	15	・一日の約半分を、睡眠を含む生活関係で費やされている。 ・睡眠や食事の時間が多かった。勉強はもっと多いと思っていたが、意外と少なかった。 ・平日は休日よりも、趣味や学習・睡眠・洗面などの時間が多くて、休日はテレビ・漫画の時間が多い。 ・平日と休日は違う生活をしているけれど、おきている時間はほとんど一緒だった。 ・⑧食事をするといった毎日必ずすることは、時間の差があまりないけれど、情報を集めたりする勉強などは前日にどれくらいやったかで量が変わるものなどは、時間のずれが大きいと思った。また体調管理など急いでやらないといけない平日は時間が少なく、その分情報の時間に入っている。
その他	9	・自分でやることが多いことがわかった。一番生活の中で長いのは睡眠だった。 ・食事や睡眠時間が多くて必要だということがわかった。遊びが以外に少なかった。 ・一日の約半分が睡眠を含む生活関係で費やされている。

ワークシートに記述された児童の気づきを、その内容によって、「学校の有無について」「人にしてもらえる行動と人にしてもらえない行動について」「行動の種類や量の違いについて」の 3 つに分類し、表 3 にしめした。下線⑥からは、休日は学校に行かないから娯楽が長くなるというように、学校に行くか行かないかで時間の使い方が大きく相違することに気づいていることが分かる。また下線⑦からは、人にしてもらえる行動が、平日よりも休日のほうが長くなっており、その差が 2 時間もあることに驚いている。ここからは、平日と休日の差を数値で捉え、客観的に比較していることがわかる。また下線⑧からは、食事など毎日行っている基本的な行動の時間量には平日と休日の差がなく、また、情報収集や勉強など自分でコントロールできるものは時間量の差が大きいことに気づいた。

このことから、平日と休日とは行う行動も異なり、また行動ごとの時間量も異なっていることを、また、毎日行う基本的なものには差がない行動もあることを理解していた。

(2) 家族の生活についての気づき

第 3 次として、家族の生活時間記録を用いて自分と家族の生活時間を比較することにした。授業の流れは表 4 のとおりである。

表4　授業の流れ（第3次　家族の生活時間と自分の生活時間の比較）

教師の働きかけ	児童の反応
・家族の生活時間を、自分たちと同じ行動分類に分けて、合計時間を出してみましょう。	・⑨自分たちの生活にはなかった、母親の家事の時間は、自分たちの掃除や手伝いと同じ内容だから人にしてもらえる行動できる。でも父親の仕事は、ひとにしてもらえる行動なのかな？
・⑩父親の仕事は、人にしてもらえる行動か、それとも人にしてもらえない行動か考えてみよう。	・⑪父親がその仕事をしないと、他の人に迷惑をかけてしまう。だから人にしてもらえない行動ではないか。 ・母親が仕事をしているけれども、母親が仕事を休むと、その分次の日とかにやっていると聞いたから、仕事は人にしてもらえないのではないかな。 ・男の人でも女の人でも、仕事は人にしてもらえない行動だと思う。 ・先生という職業は、女の人でも男の人でもれきるけれど、やっている人しかできないと思う。
・先生の職業は、男の人でも女の人でもやっているけれども、お母さんのやっている家事は、ひとにしてもらえる行動で、お父さんのやっている仕事は人にしてもらえない行動なのかな。	・そうかな。ではお父さんの仕事を人にしてもらえる行動になるんだ。
・⑫父親でない他の人が働いて収入を得ても、その家族が生活することができるのであれば、その人がやらなくてはいけないということではないよね。ですので、仕事は人にしてもらえる行動になります。	・会社は人にしてもらえる行動とすると、父も母も平日に働く時間が多かった。でも休日はゆっくりと二人ともできるために睡眠もおやつの時間も取れていた。
・家族の生活時間を、行動別に分けてみてわかったことは何ですか。	・⑬お母さんの生活は、平日も休日も同じような生活をしているけれど、お父さんは自分と同じように、平日と休日の過ごし方に違いがあった。 ・⑭お父さんは平日会社に行っていて、長い時間働いているけれど、休日は会社に行っていないからその分自由になる時間があるから。
・では、自分の生活と家族の生活時間を比べてみた時に、どのようなことに気づきましたか？	・お母さんは、平日は自分がいない時に家事をしているけれど、休日も家事をしているから変わりない。

	・⑮お父さんやお母さんは家事や仕事をやっているけれど、自分や妹は趣味や遊んでいるかわりに勉強をしていると思う。
・今回の勉強で考えたことや気づいたこと、わかったことをワークシートにまとめましょう。	・一人ひとりにやることがある。自分は学校に行くのが仕事になっている。

まず、生活時間の行動記録を「人にしてもらえる行動」と「人にしてもらえない行動」に分けさせた。さらに、人にしてもらえない行動を各班で分類した4つのグループに沿って、家族の行動の時間量を求めさせた。すると、仕事をどこに分類するかについて、議論が起こった。特に、母親の家事は児童が行っているお手伝いと同じだと考え、人にしてもらえる行動と分類したが、父親の仕事は「人にしてもらえる」と主張する児童と「人にしてもらえない」と主張する児童に分かれた。(下線⑨)

そこで、教師は父親の仕事を人にしてもらえる行動にするのか、人にしてもらえない行動に分類するのか投げかけ、学級全体で話し合った（下線⑩)。下線⑪のように、児童の多くは、父親の仕事は他の人では変わりができない責任があるものだと考え、したがって人にしてもらえない行動と分類しようとしていた。

「人にしてもらえる行動」「人にしてもらえない行動」が意味している内容が児童に理解できていなかったので、下線⑫のように、教師から、仕事は人にしてもらえる行動に分類することを提案した。こうした児童の理解のずれから、母親の家事のように、児童がその具体的内容が分かる場合や経験したことがある場合には行動の意味するところを正確に理解し分類することができるが、父親の仕事のように具体的内容を見ておらず、母親との会話など抽象的な場合には、行動の意味するところを十分に理解でず、したがって分類もできないことがわかった。

最後に、家族の生活時間からわかったことを発表させたところ、下線⑬のように、父親の仕事時間が長時間に及んでいること、さらに父親の生活は自分の生活と同じように、平日と休日で行う行動や時間量に違いがあることに気がついていた。また一方で、下線⑭のように、母親の家事時間は平日も休日もあまり変化がないことにも気づいていた。

また自分の生活と家族の生活を比べ、家族員それぞれに行動内容や時間量が相違していることに気づいていた。(下線⑮)

学級全体の話し合いでは、父親の仕事時間が長く働くことが大変だという意見が多かった。また母親については、家事時間が平日も休日も変わらないことから、毎日行わなくてはいけないため、負担が大きいという意見があった。

ワークシートの記述した家族の生活に対する気づきを表 5 に示した。

表5　ワークシートに記述した家族の生活に対する気づき

観点	記述数	記述例
性差について	14	・お父さんは（休日）趣味の時間が長くて驚いた。自分と同じように趣味が一番長い。でも平日のほうが休日よりもゆっくりしている。 ⑯お母さんは家事の仕事が多い。学校に行っている間ゆっくりしていると思っていたけど、とても大変。休日も休みが少ない。 ・お父さんは人にしてもらうと意味のない時間はやっぱり多いけど、人にしてもらえる時間も多いことがわかった。お母さんは父親と対照的だった。 ・⑰父は平日は会社で、自分が楽しむための行動が少なくて、休日は「自由時間」が多かった。母は平日も休日も家事に休みがない。父も大変だけれども、母に休みはない。 ・母は平日も休日も家事を行っていて、家事や買い物は人にしてもらえる行動ばかりなので自分より母のほうが人にしてもらえる行動が多くなっていると思う。父は休日にスポーツをしに行く日が多いけれど、母は幼い妹がいるから行くことができない。
平日と休日の過ごし方の差について	8	・⑱父も母も平日に働く時間が多かった。でも休日はゆっくりと二人ともできるために睡眠もおやつの時間も取れていた。 ・⑲平日は二人とも仕事があって、休みや楽しむ時間が少ないけど、休日は仕事がなく休めるから「楽しむ」時間が多い
ペイドワークについて	4	・父親が仕事をして生活をするためのお金を稼がなければ、借金をしないと生活できず、苦しい生活をしなくてはいけなくなってしまう。だから、父親は生活のために長い時間仕事をしている。 ・⑳お父さんはお金を稼ぐために長い時間仕事をしているので、大変だけれども、お母さんも家事を毎日がんばっていてすごいと思った。自分は家事の手伝いくらいならできるので、積極的に手伝いができるようにしたいと思いました。
その他	17	・お母さんの家事の仕事やお父さんの毎日の、仕事の時間を見て驚いた。もう少し親の生活を気にしてみたい。 ・両親が自分のためにこれほどの苦労をしているとは思わなかった。自分の生活は無駄なことが多くて母の生活と比べたら楽だと思った。 ・僕は趣味や好きなことができるのに、両親はそのようなことができないので大変だと思った。それに、睡眠時間なども短いので、お母さんのことを手伝い、家族で一緒に過ごす時間を多くすることでリラックスしてもらいたい。

表 5 では、下線⑯のように母親の家事時間が長いこと、下線⑰のように父親も大変だが母親の家事時間には休みがないことに気づいていた。下線⑱のように平日よりも休日のほうがゆとりがあること、また下線⑲のように、休日は仕事がないことをその理由に挙げている児童もいた。

下線⑳からは、父親が収入を得るために長時間働いていることに気づいていることがわかる。

４．成果と課題

(1) 成果

日記形式の生活時間調査に記録をしてもらったところ、児童は自分の生活行動の種類がたくさんあることに気づくことができた。また10分毎の詳細な記録であったために、食事や入浴など具体的で詳細な時間量を求めることができた。これらの行動の時間量を分単位で比較することができ、どの行動に何分使っているのかをつかむことができた。

平日と休日を比較することにより、学校に行くか行かないかが、1日の過ごし方に大きく影響することにも気づくことができた。

父親と母親という家族の生活時間調査を記録したことで、自分と母親と父親の生活時間の使い方に大きな相違があることに気づいた。たとえば母親は、毎日同じように家事を行っているために、休日と平日の相違が少ないこと、稼ぎ手である父親は家族のために長時間労働していることまた、父親も自分も、平日は学校や仕事で長時間束縛され、休日は趣味や娯楽を行う時間が増えるという共通点があることを見つけることができた。

(2) 課題

児童にとって理解が困難であった点は、「人にしてもらえる行動」と「人にしてもらえない行動」に二分させたことである。児童にとって父親の仕事は、他人に任せられない「責任のある意味のあるもの」であると捉えているために、人にしてもらえる行動であることに抵抗感を感じていた。

また10分後との生活時間調査では、行動の時間量を求めやすいという利点はあるものの、分類する項目が多くなるにつれ計算に時間がかかるという課題があった。

また今回の授業では、はじめに班ごとに生活行動の分類を考え、家族の生活行動の分類に、反毎に考えた分類を使った。しかし、学級全体での話し合い場面では、分類の違うものを比較を行うことが困難であった。解決策としては、児童の生活行動分類を班毎に行った後に、学級としての分類に統一させることが考えられる。

参考文献

1）Setuko Nakayama, Kyoko Ono, Midori Otake「Time-Use Data and Japannese Elementaryschool Student's Learning of Gender Differences」家庭科教育学会誌　2006年　Vol 49-3 October p171-180

2）小野恭子「家族の生活時間データーから見る子どもの生活について」東京学芸大学附属学校　研究紀要第35集　p66-73　2007